



名古屋大学 総長
濱口道成

総長挨拶

Greeting from President Hamaguchi

名古屋大学の起源は、1871(明治4)年の仮病院・仮医学校にあり、総合大学として1939(昭和14)年に名古屋帝国大学が設立され、2009(平成21)年に創立70周年(創基138年)を迎えました。この間、名古屋大学は清新で自由闊達な学風のもと、多くの優れた研究成果を生み出し、4名のノーベル賞受賞者を含む優れた研究者や、新しい時代を切り拓いてきた幾多の優秀な人材を社会に輩出して参りました。

今後、名古屋大学はさらに国際化を推進し、世界的な教育・研究拠点となり、基幹大学としての役割を果たすとともに、地域にも支持される大学を目指しております。同時に、名古屋大学は卒業生・修了生に大学の現状や将来構想の情報を積極的に渡し、ご理解を得られるよう努めます。名古屋大学全学同窓会からは、既に「キャリア形成論」の寄附講義の財政的な支援だけでなく、講師も派遣していただいておりますが、今後、活躍されている諸先輩方と現役学生との交流の場をさらに増やせればと思っております。名古屋大学が優れた教育・研究成果を生み出すだけでなく、全学同窓会と協同して社会に貢献できればと願っております。そのためには、名古屋大学を卒業・修了された諸先輩方のご支援を是非ともお願いいたします。ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

Contents

濱口総長挨拶 1
Greeting from President Hamaguchi

名古屋大学創立70周年に寄せて 2
On the Occasion of the 70th Anniversary of the Founda-
tion of Nagoya University

濱口総長インタビュー 4
Interview with President Hamaguchi

同窓会ニュース 6
NUAL News

大学ニュース 15
Nagoya University News

事務局からのお知らせ 16
From the NUAL Office



1959年当時の名古屋大学の航空写真

名古屋大学創立70周年に寄せて

On the Occasion of the 70th Anniversary of the Foundation of Nagoya University

本学が創設された1939年に、筆者はこの世に生を受けた。教育学部附属高等学校、工学部、大学院工学研究科で学び、そして、本学で定年まで教育・研究の道歩んだ。本学とともに70年と思うと感無量。本学同窓会広報委員長から本誌に寄稿依頼があったとき、その気持ちもあってお引き受けはしたが、さてどうしたものかと久しぶりに卒業アルバムを開いてみた。恩師の寄せ書きの中に「東山に一声高く雛巢立つ」とあった。豊田講堂での卒業式の後、卒業写真に納まっているその時の雛も今は古希の人である。

卒業は1962年3月。筆者が工学部で学んだのは、今から50年前、1958年から1962年の4年間。アルバムを見てみると懐かしく当時のことが思い出される。

社会背景を残そうとアルバムに写した新聞の切り抜きからは、ICBM（大陸間弾道ミサイル）、ソ連有人宇宙飛行、ソ連50メガトン爆発強行、米ソ冷戦新段階と当時が見える。国内は60年安保闘争。1960年、国会議事堂はデモ隊に取り巻かれ、それに参加の東大女子学生が死亡。もちろん、大学の中は騒然、学生はストライキだと言って授業放棄。しかし、ちょうど今年から50年前の1959年は、伊勢湾台風襲来の年でもあるが、皇太子明仁さま、正田美智子さまのご成婚で世の

稲垣 康善さん

1939年名古屋市生まれ。1962年 名古屋大学工学部電子工学科卒業、1967年名古屋大学大学院工学研究科博士課程電子工学専攻修了、工学博士。同年、名古屋大学工学部助手、講師。その後、名古屋大学工学部助教授、三重大学工学部教授を経て、1981年名古屋大学工学部教授、2003年名古屋大学を定年退官。この間、名古屋大学評議員、大学院工学研究科長・工学部長などを務める。その後、愛知県立大学情報科学部教授、学部長、愛知工業大学教授、を経て、2008年より豊橋技術科学大学理事・副学長。また、現在、名古屋大学名誉教授、愛知県立大学名誉教授。



中が沸き、巨人軍のON時代が始まり、白黒テレビが全国に普及した年。いわゆる岩戸景気の時期である。我が国は高度経済成長が始まる直前だった。

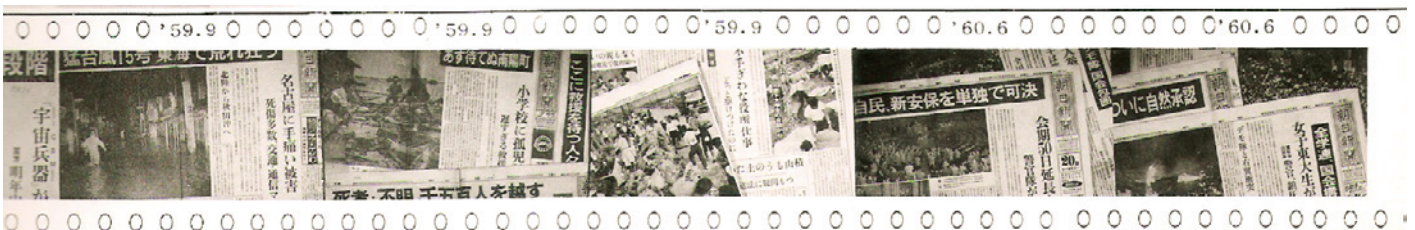
しかし、本学といえば、まだタコ足大学、理学部、工学部は東山にあったが、本部、図書館、文学部、教育学部は名古屋城内、教養部は滝子。59年に経済部、法学部が東山に移転、翌60年に豊田講堂が竣工した。東山キャンパスへの集結が本格的に始まった時期である。アルバムにある当時の航空写真。写真の右端に建ったばかりの豊田講堂が見える。鉄筋コンクリートの建物は、理学部、工学部の1、2号館、経済

学部と法学部。理学部、工学部の木造の校舎も見える。今は図書館が建ち、大木に育ったクスノキの並木のグリーンベルトの位置には、工学部の木造校舎も見えるが、その他は、まだ赤土のままであった。山を削り、谷を埋める造成中のようなキャンパスであった。

それでも学生は自由な学風を胸一杯に吸って未来の希望に向って胸を大きく膨らましていたように思う。筆者らが20歳の若者であったように、本学も若い大学であった。第1回名大祭は、豊田講堂ができた1960年。東



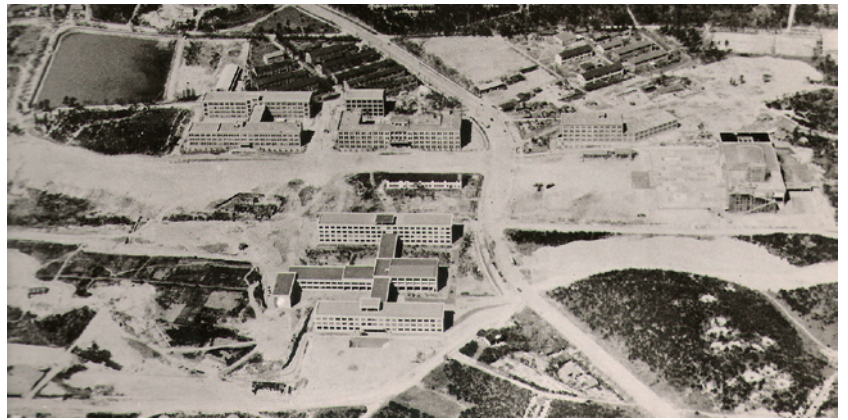
豊田講堂前での、筆者同期の工学部電気・電子工学科卒業式（1962年3月26日）記念写真と寄せ書き



大には五月祭があると、全学の学生が大学祭作りに頑張った。大学も東山統合を目指し、総合大学として機能を高めようとしていたと思う。いまに比べれば、本当に粗末な校舎、キャンパスであったが、成長期の生き生きとした大学であった。雰囲気も自由であった。

旧帝国大学の最後の大学、なんでも7番目の大学と、本学の教職に就いてからそう思ったこともあったが、「特色あることをしなさい、他のまねしていると7番目のままですよ」と工学部創設当時の先生方から、事あるごとに言われたのを思い出す。当時、先生方の熱意をいつも感じていたように思う。その熱意で、筆者の学んだ電気・電子の分野で言えば、電子顕微鏡、プラズマ、最近では青色発光ダイオード、世界の最先端をいく研究分野を切り開くことができたのだと思う。人工知能研究をしたいと学部卒業の時に思った筆者自身は、周りにその分野の専門家がほとんどいない中で、情報工学分野の研究をすることができた。これも若い自由な雰囲気あふれた環境があつてのことだったと思う。この自由な学風はいつまでも大切にしたいと思うのは筆者だけではないと思う。

筆者が工学部を卒業してから約半世紀、いま地下鉄を名古屋大学駅前で降りて地上に立つと豊田講堂と図書館を結ぶグリーンベルトを挟んで北側に工学、理学部、南側に文系学部の立派になった校舎が並ぶ。地下鉄駅のすぐ前には高層の研究棟が聳える。この50年の間には、各学部・学科創設、大学院重点化や新研究科の創設、国立大学法人化もあった。科学技術基本法が制定され、科学研究費補助金など競争的研究資金も豊富になった。しかし、大学の評価は、外観ではなくその内容によってきまる。焼け跡やバラックの中から有為の人材が育ち、多くの優れた研究が生まれた。自由な学風と熱気に溢れた研究心は、2001年に「不斉触媒合成」の野依博士、2008年には「小林・益川理論」の益川、小林両博士、「緑色蛍光タンパク質」の下村博士のノーベル受



1959年当時の名古屋大学の航空写真

名
大
祭



第1回名大祭の頃のスナップ写真

賞に繋がったのだと思う。今日の整備された本学から、さらに豊かな教育・研究の成果が期待される。この期待にこたえてこそ、世界の COE、知の拠点になることができよう。

名古屋大学に栄光あれ、さらなる発展を祈ってペンを置く。



濱口総長インタビュー

Interview with President Hamaguchi

2009年4月、名古屋大学総長に濱口先生が就任されました。就任1ヶ月でのご心境や、名古屋大学の将来像、同窓生や同窓会への期待などを、ご自身の経験も踏まえてお話いただきました。



濱口 道成 総長

1951年 三重県伊勢市生まれ
1975年 名古屋大学医学部医学科卒業
1980年 名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了
1980年 名古屋大学医学部附属癌研究施設助手
1984年 名古屋大学医学部附属病態制御研究施設助教授
1985年 米国ロックフェラー大学分子腫瘍学講座研究員
1993年 名古屋大学医学部附属病態制御研究施設教授
2001年 名古屋大学大学院医学研究科附属病態制御研究施設教授
2002年 名古屋大学大学院医学系研究科附属病態制御研究施設教授
2003年 名古屋大学大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授
2004年 名古屋大学大学院医学系研究科副研究科長
2005年 名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長
2009年 名古屋大学総長

専門：腫瘍生物学、腫瘍生化学、細胞生物学

主な役職：日本癌学会評議員、日本生化学会評議員、日本ウイルス学会評議員、愛知県医療審議会会長

(広報委員) はじめに、濱口先生がどのような方か同窓生に向けて自己紹介いただけますか

(濱口総長) 私は昭和50年に名大の医学部を卒業し、1年間研修医をしたあと大学院に入って基礎研究を始めました。卒業して、ロックフェラー大学の花房秀三郎先生という、オンコジンの研究をされていた日本人の先生のもとに3年おりました。ガン遺伝子を研究する生活に入りました。医師というのは名ばかりで、人付き合いがあまり上手な方でないため、研究者になろうと思ったんです。

今年の4月で、大学に入ってから40年になります。大学に入った時は、大学紛争のさなかでして、東山キャンパスにいた時はほとんど授業を受けませんでした。僕らの時代というのは、世の中に根底から価値観が変わるような動きが常がありました。その中で、自分一人で自分だけの道を生きていきたいという思いがすごく強かったです。

40年経って、東山へ帰ってきて思うのは、大学時代の6年間の勉強の中で、自分にとってはいろんな価値観の骨格を作っていく上で、教養部時代が実は一番大きかったということです。教養の頃に勉強した内容というのは、医学の勉強とすごく違って、普遍的な真理を教えてもらったように思います。それはすごく人間の本性に強い影響を与えるものがあります。よい知識というのは、長い時間の中で、人生体験というフィルターをとおり自分の中で結晶化してくるような実感がありますね。その結晶化していくような知識、文学

や哲学や歴史や人文社会学というのは、教養の時に一番出会っていたように思うんです。それは自分の判断の骨格になっているように思います。いろいろな問題を解決していく時にも、どう考えるかという時に、自分を支える知識になっていると思います。40年ぶりにハッと気が付いた真実です。

(広報委員) 総長に就任されて1か月経ったご心境をお聞かせ下さい

(濱口総長) 大学は文化のつぼのような部分があって、本当に多様性がありますね。同じキーワードを話していても、感じている意味合いというのは、微妙に学部や文化の背景によって違うものがあるということに最近気づき始めました。また、これだけいろいろな能力を持った人がいて、大学という組織に対してロイヤリティや愛着をしっかりと持って、安月給でも、徹夜で平気で働く人がごろごろいる、こんな組織は多分ないと思います。多様なカルチャーがありながら、ベースになっている判断基準やモチベーションは非常に均一です。

さらに、組織が自律的に動いていますね。大学の人たちは浮世離れしていると言われるかもしれませんが、その裏返しでかなり自律的に動きますね。情報を提示すれば、それに対して判断がちゃんと返ってきます。だからどんな状況があっても、うちの大学というのは本当に強い組織だと改めて実感しています。

大学の中だけではなく、全学同窓会の豊田会長をはじめ、いろいろな方にご挨拶に伺って、素晴らしい能力で厳し

い実業の世界を生き延び、世界的な企業を作ってきた先輩がこの大学から沢山出ているということに改めて気がつきました。そういった方は異質の体験と価値観と判断を持っておられ、すごく新鮮に感じています。だから、同窓会はものすごく大事だなというのを実感しています。

(広報委員) 任期の間に実現したいことについてお話いただけますか

(濱口総長) 高等教育の結果が出てくるのは長い時間がかかりますから、5年6年で実現したいというのはデリケートな部分があります。ただ、実際に社会の一線に出ておられる先輩の方々にお会いして実感することは、例えば、名古屋大学の卒業生を会社で雇われて実際にどう思われますかという質問をしてみると「非常に誠実である、実直である」と言われますが、もう一つ積極性が弱いとか、アピールをしっかりとできないとか、新しい分野を開拓する時のパッションが少し少ないように見えるとも言われます。

ですが、それが良い悪いというのは別問題だと思います。実のある、粘り強い仕事をやる人材というのは、日本の文化ですし、大事だと思います。さらにもう少しの積極性を、具体的にいえば国際的な通用性を持った人材に育つとしたら、これは非常に強い力になると思います。独自の文化を持ちながら国際的な通用性を持った人材をどれくらい育てられるか。それを教育の中でどういうふうにして実現していくのかを、任期のうちにしっかり考えたいなと思っています。さらに、学問領域としては、幅広い学問をきちっと勉強できることです。教養教育というのはとても大事だと実感としてありますし、自分自身の専門だけにどっぷり浸かるのではなく、幅広い知識を持った人材を作れば、むしろそういった我々が受け入れている人材を活かして伸ばすシステムが今の時代の中にできるのではないかと期待しています。

だから、任期中で何をやりたいかという、漠然とした言い方になりますが、名大と呼ばれている我々の大学をナゴヤ・ユニバーシティという状態にしたいと思っています。世界から見ても、ノーベル賞を取られた方がたくさん出ているので、それを国内外で正しく認識されるようにしていく作業が必要だと思います。

(広報委員) 同窓生や全学同窓会に期待することがありましたらお願いします

(濱口総長) 一番ありがたく思っているのは、実際に総長という仕事をいただいて、先輩の先生方とおつきあいますと、純粋な大学に対する愛情を持っておられる方が多いことで



インタビューの様子

です。それはおそらく18から20代前半のところを育った時の大学の体験がすごくよかったのだと思うんです。だから今もそういう環境ができるように、整備していかなければいけないと思いますし、そのためには同窓会の先輩のご支援が必要です。今、経済状況が非常に悪いですけれども、一喜一憂しないで、粘り強く、名古屋大学がしっかりした財政基盤を作るために、何年かかってでも名古屋大学基金は守り育てていかなばと思います。是非ともご理解をいただきたいというのが、今一番の願いです。

同窓会の先輩は、本当に素晴らしい能力と才能を持っておられる方が沢山おられるので、そういう方々に学生が接する機会をもっとたくさん増やしたいなと思っています。

その点、同窓会の寄附講義については、素晴らしい試みだと思います。自分という人間ができあがってきたのは、本当に先輩のおかげです。先輩の方々の影響なしに自分という人格はできなかったと思いますし、先輩がいなかったら、今の人生はもっと変わっていたなと思います。普通の医師としてどこかで、違うところで働いていたかもしれません。

先輩の影響は強烈で、それだけの力を先輩方は持っています。ですから、どんどん今の大学生にも影響を与えていただいて、若者の人生をしっかりと歪めていただきたいと思います。そういうチャンスをもっとたくさん作れたらなと思います。素晴らしい先輩と今の学生が出会う機会をどう作るか、大学という場の中で工夫をしたいなと思っています。

(広報委員) 本日は貴重なお話ありがとうございました。

(2009年5月)

同窓会ニュース NUAL News

濱口総長韓国支部を訪問

2009年7月28日（火）に韓国（ソウル市）の新羅ホテルにて、名古屋大学全学同窓会王成宇韓国支部長他と濱口道成総長との懇談会が開催されました。濱口総長が韓国・成均館大学での学术交流協定締結記念式典及び名誉博士学位記授与式に出席することに伴い、この懇談会が執り行われました。

急な開催となったにもかかわらず、支部役員を中心に6名の出席がありました。出席者の殆どは、大学の教員として活躍しており、起業家として活躍している方もいました。当日は、新羅ホテル1階にあるレストランパークビューにて昼食をとりながら懇談が行われました。まず、濱口総長から挨拶があり、韓国支部との懇談会開催についてお礼の言葉が述べられました。その後、各参加者から自己紹介がありました。また、濱口総長から、ノーベル賞受賞者を含む最近の名古屋大学のトピックスについて、プロフィール冊子を基に近況報告がありま

した。名古屋大学での恩師との出会いや自由闊達な学風の下での研究がノーベル賞受賞につながる一因となった旨説明があり、同窓会支部メンバーは感銘を受けていました。同窓会支部メンバーからは、韓国支部の活動を発展させていくために、現在名古屋大学にいる韓国人留学生の情報が欲しいとの要望がありました。日本では、今般、個人情報保護法の観点から個人情報の提供が難しいが、全学同窓会との連携をより深めるために鋭意努力し協力する旨総長から説明がありました。懇談会は、名古屋大学在学中の思い出話に花が咲き、お互いの親交を深めるものとなりました。最後に、同窓会支部メンバーが準備してくださった歓迎垂れ幕の前で集合写真を撮り、和やかなうちに懇談会を終了しました。

なお、全学同窓会韓国支部は、2005年5月5日に、海外支部として初めて設立された支部です。



名大プロフィール冊子を基に話に聴き入る同窓生



韓国同窓生と濱口総長

名古屋大学全学同窓会モンゴル支部創設される



名古屋大学全学同窓会代表幹事
伊藤 義人
昭和50年工学部卒、昭和52年修士修了
名古屋大学情報連携統括本部副本部長・
情報戦略室長

去る平成21年9月3日（木）にモンゴル国の首都ウランバートルのバインゴルホテルで、名古屋大学全学同窓会のモンゴル支部の設立総会が行われました。これは、名古屋大学日

本法教育研究センター（モンゴル）3周年記念行事と名古屋大学フィールドリサーチセンター開所式に合わせて行ったものです。多くのモンゴル人の名古屋大学卒業生・修了生や名古屋大学関係者が参列しました。大学側からは濱口総長、佐分理、渡辺副総長、杉浦法学研究科長はじめ両センターと医学部の関係者にご出席いただき、全学同窓会からは、連携委員会委員長の中野先生と私が参加致しました。

設立総会では、日本語とモンゴル語の通訳を使って行われました。設立に向け整備した名簿では、モンゴル人の留学経験者など70名近くの同窓生がおられ、当日の参加者は、名

古屋大学からの参加者を含め60名弱となりました。モンゴル支部の支部長は、元保健省事務次官で現在同省のプロジェクトマネージャーのDr. ALTATUYA Jigjidsuren（女性）がなられました。医学系研究科のヤングリーダーズプログラムの修了生です。

設立総会では、中野連携委員会委員長の司会で、まず、濱口総長の挨拶がありました。日本法教育研究センター（モンゴル）の3周年と新たに開設するフィールドリサーチセンターの開所式に合わせて、モンゴル支部が、他の7つの海外支部に引き続いて設立されたことに対する謝意と、今後の名古屋大学の国際交流の促進について決意が示されました。

また、現在1300名を越える留学生がありますが、その内25名がモンゴル国からの留学生であることが紹介されました。今後、モンゴル支部が卒業生・修了生の精神的な支えになってほしいとの要請がありました。

その後、代表幹事の私から、豊田会長の祝辞を伝え、全学同窓会の設立の経緯や理念を説明し、大学が管理することになった電子名簿が、もうすぐ開始するので住所変更をインターネット経由で行ってほしいことと、今後、名古屋大学の国際

交流の拠点になることを願いました。

挨拶の後、濱口総長から、同窓会のモンゴル支部旗と支部認定書を、モンゴル支部支部長の ALTATUYA（アルタンツェヤ）さんに渡されました。そして、ALTATUYA（アルタンツェヤ）さんからの挨拶がありました。今回のモンゴル支部設立を同窓生は大変喜んでおり、今後、名古屋大学全学同窓会の理念に従って、大学や全学同窓会の情報を共有し、名古屋大学の情報発信や国際交流に貢献したいという話がありました。また、支部長選出方法なども含めた支部規約をつくり、継続的に活動するとともに、資金を集めて留学生を名古屋大学に送るような事業の必要性も話されました。

設立総会終了後に、総長を中心として卒業生・修了生が、支部旗を入れて記念撮影をしました。参加者の皆さんに大変喜んでいただいた設立総会になりました。

設立総会の後で、大学主催の祝賀会に、支部旗を持って合流して、楽しい交流のひとつときをすごしました。

なお、今回の設立総会については、名古屋大学法学研究科の中村講師に大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。



総長の挨拶



代表幹事挨拶



支部旗の授与



ALTATUYA（アルタンツェヤ）支部長の挨拶

活躍する会員たち NUAL People in Action

「活躍する会員たち」では、同窓生会員の各界におけるご活躍ぶりを紹介しています。第9回は、名古屋大学工学部を卒業され、今年1月に日本アイビーエム（株）代表取締役社長に就任された橋本孝之さんにお話をうかがいました。また、名古屋大学大学院人間情報学研究科を修了され、現在中京大学でメディア技術の基礎と応用に取り組まれている遠藤守さんにご寄稿いただきました。

This column "NUAL People in Action" features our alumni playing active roles in various fields. In this ninth issue, we have contributions from Mr. Takayuki Hashimoto, President of IBM Japan, Ltd. since January 2009, who is a graduate of the School of Engineering, Nagoya University, and from Prof. Mamoru Endo, currently working on fundamentals and applications for media technology at Chukyo University, who is a graduate of Graduate School of Human Informatics, Nagoya University.

橋本 孝之さん



1954年名古屋市生まれ 1978年名古屋大学工学部応用物理学科卒業後、日本アイビーエム(株)入社。名古屋地区営業担当、1990年 IBM コーポレーション、コーポレート・ビジネス・ストラテジー、1993年東京首都圏営業総括本部 第二営業部部長、2000年取締役ゼネラル・ビジネス事業部長、2003年常務執行役員2007年専務執行役員グローバル・テクノロジー・サービス事業担当。2009年1月代表取締役社長。

名古屋生まれの名古屋育ち。現在、グローバル企業の社長として、ITを使って地球を賢くする「スマート・プラネット」を提唱する。学生時代に培った根底に流れている考え方と国際化についてうかがいました。

インタビュー：関東支部事務局長 片岡大造

片岡：どのような学生時代を送られたのでしょうか？

橋本：ギター・マンドリンクラブで、マンドロンチェロというのを弾いていました。

勉強は、応用物理を専攻するにあたり「ニュートン力学」を理解しようと1週間名古屋大学の図書館に通い詰めたことも。毎日粘り強く考え続けるうちに、パッと明かりがついて、抜けたような感覚が訪れ、どんな問題が来ても解けるようになった。これが大きな経験と自信になった。

研究室では、朝早く大学に行って、実験して夜遅く帰る生活でした。名大は、学生に手厚いと思います。私の所属していた研究室には4年生3人に対し、高木（豊）先生、石橋（善弘）先生、澤田（昭勝）先生に加え、2人の助手と、4人位の院生がいました。これらの方々に朝から晩まで教えていただいて、本当に恵まれた環境でした。

片岡：IBM への就職はどのようにして…

橋本：大学へは親元から通っていたので、早く独立した

という気持ちもあって、就職活動で日本 IBM を受けました。外資系で実力主義の会社という印象でした。先生に相談したら、「日本一か世界一か、働く環境としては世界一のほうがいいんじゃないか」というアドバイスで背中を押していただきました。

片岡：それで、IBM に入社されたのですね。

橋本：入社するときに、履歴書に希望を書くんですよ。私は、「大型機で、システムエンジニアで、名古屋以外」を希望しました。ところが配属は正反対の「小型機の営業の名古屋地区担当」。それでも与えられた仕事にひたすら取り組み、11年の名古屋勤務を経て、ニューヨーク勤務になったんです。英語もままならない中で、2年間も。世界中の人と仕事をする非常に貴重な体験となりました。

ヨーロッパ地域やアジア地域を統括する本部に出張することも多く、週のうち半分ぐらいは飛行機に乗って仕事をしました。まさに人生の転機でした。その後、今度は東京へ転勤になって、営業部長や、システム製品の事業部長をやったりして、今日に到っています。仕事をしていていつも思うのは、自分自身の中には、名大で得た、物理学的な考え方がある。私が物事を論理・系統立てて行えるのは、やはり4年間の大学生活の中で、粘り強く取り組むことと論理的思考能力を鍛えられたからだと思っています。ニューヨークでは、上司が言っていること

も分からない状態でしたが、英語学校に400時間通い、めげずに学び続けるうちに、3カ月ほど経過したある日、突然英語が分かるようになりました。また、IBM が世界でどういうふうにもオペレーションされているのか、誰が物事を決めて、どう動いているのかという仕組みも、いろいろな話を聞いて総合してゆくうちに、論理立って解ってきた。ひとつひとつの事象や知識を客観的に捉え、体系付けることが理解につながる。核になる価値観だとか、物事のとらえ方だとか、軸足となる考え方です。

特に IBM という会社はものすごく変化が激しい。もともとは世界最大のコンピューター・メーカーでしたが、今は IT サービスやソフトウェア事業が売り上げの大部分を占めています。その変革の一番の軸足は、IT を使ってお客さまに貢献していくということです。

今、IBM は「スマーター・プラネット」*という新しいビジョンを提唱しています。「企業」枠を超えて、「社会」の非効率を解決する。スマートというのは賢い。プラネットは、地球。賢い地球を IT で支援するということです。具体例としては、交通渋滞を解消するためのシステムがあります。スウェーデンのストックホルム市では、市中心部に入出入りする車がコントロール・ポイントを通過するたびに課金するシステムを2006年に導入しました。車を切れ目なく検出、識別、課金するために、レーザー、カメラ、システム技術を駆使した、車の流れを阻害しない路側システムを採用しました。時間帯によって異なる税金額を設定し、ピーク時には最も高い金額を課金することで、同市は、交通量を25%削減し、また二酸化炭素排出を14%削減、加えて公共交通システムの利用者を40,000人増やすことに成功しています。

片岡：なるほど、今我々が抱える課題解決に IBM が取り組まれる根底にあるものは？

橋本：1つは今回の金融危機が象徴するように、利益至上主義が終わりを迎え、21世紀型の価値観が求められていることです。2つ目は IT が活用できるすそ野が広がり、新しい適用分野の拡大が企業や社会の発展を大きく促すこと。3つ目は、それをサポートできるテクノロジーの進化を総合的に活用すること。現在ではあらゆるものに IC チップが埋め込まれ、そこから情報を発信できます。安価になったインターネットでその情報を相互に接続し、高性能になったコンピューターでそれらの情報を分析する



インタビューの様子

ことで新たな知見を得て、さまざまな問題を解決することが可能になっています。

片岡：最後に、今、名大は、文科省の「国際化拠点整備事業～グローバル30～」に採択されて国際化拠点を目指しています。

橋本：国際人財を育成するためには、使える英語を大学時代にマスターしておくことが重要です。決して難しい学問として考える必要はなく、伝わって、聞ければ十分です。2つ目には、国際人として日本人以外の人たちとの交流を深める。あえて異文化に自分をおいてみる。その中で競争していく環境を自分自身でつくっていくこと。3つ目には、自分の強さや弱さを知って、強いところはどんどん強化し、弱いところは他人から吸収する。自分自身のコアコンピテンシーをきちんと持っていくということが私は必要だろうと思いますね。

私自身、名大に何か貢献できることがあればやります。どうやって、グローバル企業で社長を経験できるようになったかという自分の経験談も含めて。今の世界の状況は、チャンスですよ。名大全学同窓会も、国際人を育成するための活動というのもあってもいい。各国にいる人たちと、ネットワークを強化してね。

片岡：ぜひお願いしたいと思います。本日は、お忙しいところ、貴重なお話を、ありがとうございました。

(文責：片岡大造)

※参照：詳しくは、下記に、掲載もされております。

1. A Smarter Planet: April 2009 Diamond Harvard Business Review
2. 「無限大」No125 Smarter Planet 特集 地球を、より賢く、よりスマートに。

遠藤 守さん



1974年、長野県生まれ。2003年、名古屋大学大学院人間情報学研究科博士後期課程修了、博士(学術)。同年、中京大学情報科学部メディア科学科講師。2008年、中京大学情報理工学部情報メディア工学科准教授。愛知留学生会後援会副会長、名古屋大学情報文化学部・人間情報学研究科同窓会副会長など。現在の研究活動は、バーチャルリアリティやネットワーク、組込みシステムやメディア技術の基礎研究と、その社会的・国際的な応用研究をテーマにしている。

人間情報学研究科での研究生活

私が入学した1997年は人間情報学研究科発足から5年が経過し、情報文化学部の第1期生が4年生に進級する時期でもありました。当時新しいスタイルの独立大学院として認知され、また情報文化学部との連携により、これまでにない広範な学問分野をカバーするユニークな研究科でした。研究活動は現在も多方面でご活躍中の横井茂樹先生と安田孝美先生、茂登山清文先生に師事しました。情報技術の様々な可能性や社会への影響を実践的に追求するその研究手法は、現在でも私の研究スタイルの基盤になっています。

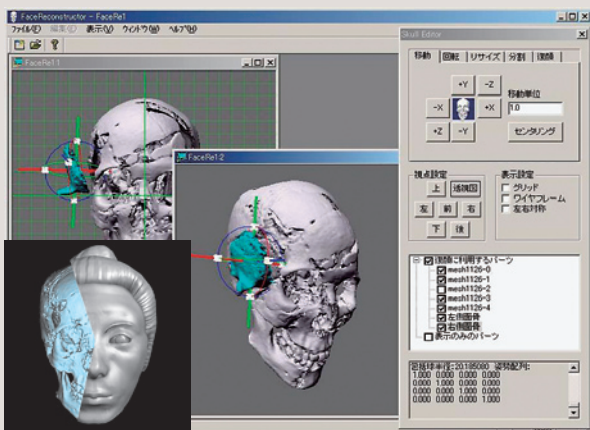
研究テーマはコンピュータグラフィックスやバーチャルリアリティの研究を基礎とし、これらに関連して当時急速に浸透しつつあるネットワーク技術や産学連携などをキーワードに活動を行いました。

在学中に特に印象的だったプロジェクトは、人類学者との共同研究による古代日本人の復顔プロジェクトでした。発掘された貴重な資料をCT スキャナを用いて傷

付けることなく、コンピュータによる仮想空間上で復元し、統計から得た日本人の平均的な厚みをもった皮膚をかぶせるという手法を実現したシステムの開発を行いました。

情報技術の社会応用

名古屋大学を卒業した2003年より中京大学で教鞭を執ることになりました。在学中に参加していたリサイクルパソコンの利活用プロジェクトの成果から、当時の名古屋市長松原武久氏の発案で中高齢者向けの情報化推進事業に参画しました。本プロジェクトは通称「e-なもくんプロジェクト」と呼ばれ、2004年から開始され、名古屋市と名古屋都市産業振興公社、名古屋大学、中京大学、ほか複数の大学とパソコンリサイクルを推進するNPOとで共同開発を行いました。開発したソフトウェアは初めてパソコンを使う人でもマウス操作のみで簡単に電子メールとインターネットホームページ閲覧を可能にしました。本プロジェクトは今年までの約5年間に4千名を超える受講者を対象に名古屋市16区の生涯学習センター



古代人の復顔アプリケーションと復顔結果



「e-なもくん」ソフトウェア

にて講習会が開催されました。受講者の皆さんが生き生きとした目で知人に電子メールを書くその姿がとても印象的でした。

メディアと国際化

近年の情報化の波はコンピュータを我々の日常生活に欠かせないものにしつつあるだけでなく、同時に国境を越えて急速に広がり続けています。インターネット網は世界中に張り巡らされてはいますが、世界が真の国際化社会となるためには未だ解決しなければならない課題が多く、この点において情報技術の活用が重要な鍵となることは間違いのないでしょう。

私は在学中の生活の殆どを、名古屋大学インターナショナルレジデンスのチュータとして留学生らと寝食を共にしてきました。現在は研究活動の傍ら、名古屋大学内に事務局を置く愛知留学生会後援会に所属し、愛知県内の留学生を支援することを目的とした様々な活動を行っています。本会が発足された当時（1961年）には愛知県内の留学生は非常に少なかったと聞いていますが、現在全国には11万人を超える留学生がおり、およそ5千人強の留学生がこの愛知県で学んでいます。現在も着々と準備が進む「留学生30万人計画」にもあるように、大学組織にはこれまで以上に重要な役割を求められています。

幸運にも本年1月には内閣府が実施する第21回世界青年の船事業において「情報・メディアコース」の指導官として乗船することができました。日本を含め13カ国もの次世代を担う青年らが40日間という長い航海の中で共に過ごし、トンガやニュージーランドに寄港しながら互いに切磋琢磨しました。本事業には名古屋大学からの学

生も数名参加しており、私自身も青年らに刺激され、大変貴重な経験を得ることができました。この愛知からも国際社会で活躍できる高いリーダーシップを有する学生が数多く輩出されることを望みます。



内閣府青年国際交流事業 第21回世界青年の船にて

おわりに

私が修了した人間情報学研究科は、平成15年に学生の受け入れを停止し、当時お世話になった諸先生方の多くは同年設立された情報科学研究科に所属されました。自身が修了した研究科は発展的に解消されましたが、これも急激な変化を伴う時代のニーズに則ったもので、当時の研究科の理念は今も生き続けていると思います。

最後になりましたが、名古屋大学の益々のご発展をお祈り申し上げます。

支部・部局便り News from the Alumni Associations of Different Schools and Regions

部局や地域ごとの同窓会から寄せていただいた便りを掲載します。それぞれが全学同窓会と連携しながら活動しています。

Here you can find announcements and news from alumni associations of schools and/or regions. These associations and NUAL are cooperating with each other to everyone's benefit.

関東支部 NUAL Kanto Branch

関東支部は、東京・神田錦町にある学士会館内に設置されている、名古屋大学東京連絡所 <http://www.gakushikaikan.co.jp/info/access.html> を拠点としております。

本年の活動は、①基金募金活動、②関東における行事への会員の参加、③学士会との連携強化と会員増加の為の活動、④卒業生とのネットワーク構築の為、東京連絡所を名古屋大学の東京拠点として強化体制を整備、情報収集に当たること、⑤創立70周年事業への協力、⑥ホームカミングデイへの参加、⑦全学同窓会の支援事業特にキャリア形成論へのメンバーの参画などであります。

基金募金活動では、厳しい状況の下ではありますが、中長期的な展望を持って、卒業生と産業界・企業訪問を推進しております。企業には、お願いを続けており、このところ、電機・情報大手6社、製薬大手7社、鉄鋼3社、自動車・証券・銀行などの企業を訪問してまいり、ご寄付のご返事をいただいております。今後も、連携を深めて、継続してまいります。

関東における行事としては、名大関東男声合唱団の東北大などとの共同発表会を学士会の後援のもとになされたことや、名大法情報研究センターによる「法令外国語訳データベースシステムによる日英両言語での情報発信」シンポジウムにも多くの関東在住同窓生の参加を得ました。11月6日に、東京国際フォーラムにて体制移行国・発展途上国への法学教育国際シンポジウムを開催する事に、協力してまいります。

学士会との事業協力としては、卒業式などで、豊田会長からも呼びかけていただいて、会員入会に努めました。「七大学総合体育大会」は学士会も協賛しております。来年の七大学戦は、名大が幹事大学であり、多いに活躍の支援をしたいと思います。学士会の「学士会会報」や「U7」編集に協力もしております。月例講演会の夕食会に、名大卒業生のノーベル賞受賞の益川先生を招いて講演していただきました。広報コーナーに名大グッズなどを置かせてもらっております。一昨年から続けている團藤・黒川フォーラムに、これから進学してくる若手中高生との議論の場を提供して、将来国際的に活躍する人としての夢などの議論を通して、人材育成に努めております。名大にて、就職セミナーなどの開催や名古屋と東京など地域別・異業種・業種別の若手会員懇談会の開催に、若い名大会員の参加

も盛況になり、幅の広い会員間の交流が高まってまいりました。

本年上期の名大教養教育のキャリア形成論講座に、2名の講師を送り、全学同窓会と学士会のことや、国際的な経済危機の中での我国の立場・国際的な人材育成・イノベーションについての講義をしました。全学の2年を対象に、リベラルアーツや国際的なイノベーション人材として、名大生に大いなる志と熱意を持ってもらうべく講師達は努力しており、今後も継続してまいりたいと思っています。

秋には、名古屋にて開催の、70周年記念事業やホームカミングデイへの参加に努めます。

本年度は、東京フォーラムがないので、新春に、東京にて関東支部の交流会も予定したく思っております。在京の皆様には、是非、ご参加を頂きたいと思っております。

大学と全学同窓会の情報発信のために、名簿整備をして、宛先不明の方の解消をはかり、卒業年次ごとのネットワーク構築にとりかかりたく思います。

いろいろな、同窓生のネットワークの統合された、事務局の確立を、インターネットを使って、してゆきたく思っております。ご連絡とご支援をお願いします。

■連絡先 (事務局長 片岡大造)

〒101-8459 東京都千代田区神田錦町3-28
社団法人 学士会 内
名古屋大学 東京連絡所

名古屋大学遠州会 NUAL Ensyu Branch

名古屋大学遠州会は静岡県西部の全学同窓会として平成8年に発足し、14年目となる今年は同窓会を6月13日(土)にオークラクトシティーホテル浜松にて開催し85人の会員が集まりました。今回は来賓として濱口総長、伊藤全学同窓会代表幹事と吉田秘書課長にご出席頂きました。

乾会長の挨拶に続いて濱口総長からは昨年の名大関係者3人のノーベル賞受賞や日本の貿易黒字の大部分を名古屋を中心とする中部地区が上げて来た実績、その中部の人材を育てる名大の役割、更に国際性を高め、世界中から留学生が名古屋を目指し、卒業生が世界の舞台で活躍するよう、真の「ナゴヤユニヴァーシティー」を目指す熱く語られました。また今年は名大創立70周年にあたり記念事業の名大基金への協力を呼びかけられました。伊藤代表幹事からは全学同窓会の活動の近況報告がありま

した。

遠州会としても70周年事業に少しでも協賛すべく繰越金の中から名大基金への寄付を決議し、大久保名誉会長から濱口総長に寄付の目録を贈呈致しました。続いて小講演として浜松市消防局・上条救急管理グループ長の「消防救急と医療機関との連携」と題して静岡県西部地区の救急体制について聴講致しました。

懇親会は会費の優遇で若い層や女性会員の出席が少しずつ増え、若い女性演奏者のエレクーン演奏をバックに華やいだ雰囲気が始まりました。濱口総長も各テーブルを廻って親しく歓談したり、一緒に記念写真に入って頂いたりして盛り上がりました。また今回は出席者に名大グッズを記念品としてお配りしました。

遠州会では定例の役員会を補足する意味で毎月定例のフリーサロンをスタートし、食事しながら気軽に情報交換をしたり遠州会運営上の課題や次年度の総会の企画の検討をしております。

遠州会は静岡県西部地区に在住又は在勤する名大卒業生が対象ですが、若い層の把握が難しく、大学との卒業生名簿等の情報連携が求められています。

(事務局 内山 記)



女性会員も増えてきました



濱口総長、寺尾浜松医科大学長（右から2人目）と共に

同窓会支援事業 NUAL Support Project

全学同窓会では、全学同窓会の活動理念に沿った名古屋大学の活動（学生支援、就職支援事業、本部・部局による行事・寄附講義等）への支援を目的として、平成16（2004）年度より、公募型の大学支援事業を開始しました。この事業は年2回募集を行い、選考にあたっては選考委員会を組織し、厳正に行っております。平成20年度後期の採択事業3件について、担当者より報告いただきました。

NUAL commenced an open invitation type support project from 2004 for Nagoya University's activities (including student activities, employment support service, events and lectures) in harmony with the activity principle of the association. This project extends invitation twice a year and the Selection Committee is organized to implement a strict selection of activities. The following are summaries of the activity selected in 2009.

第14回名古屋大学下宿用品リユース市

申請代表者：横山有香

（第14回名古屋大学下宿用品リユース市実行委員会代表 法学部3年）

名古屋大学下宿用品リユース市とは、卒業生などから使わなくなった家具や家電を提供していただき、それらを主に新入生に譲り渡すイベントです。粗大ごみとなってしまう下宿用品を少しでも減らし、環境負荷軽減につなげると共に、参加した方にリユースの手軽さやお得さ、身近さを感じてもらうことを目的としています。特に今回は、名古屋大学の学生のみならず広く地域の方々にもリユース市の存在を知ってもらい、より多くの方に参加してもらうことを目標に広報活動に力を入れました。ピラ撒きの際に名古屋市環境キャラクター「ジュンちゃ

ん」の着ぐるみを活用したり、報道機関に積極的に取材をお願いしたりしました。

また、下宿用品の回収活動では、レンタルしたトラックで実



当日の様子

行委員会のメンバーが下宿先まで伺ったり、提供者の方に直接持ち込んでいただいたりして物品を回収し、きれいに掃除をした上で大学内に保管・管理をしました。天候に恵まれず大変な思いをしたこともありましたが、提供者の方からお礼の言葉をいただいたり、メンバー同士で会話をしながら掃除をしたりと楽しく活動ができたと思います。

そして、去る平成21年3月30日（日）に名古屋大学豊田講堂にて第14回下宿用品リユース市を無事に開催することができました。当日は天候に恵まれ、また、積極的に広報活動をした成果もあって、約500名の方に来場していただきました。午前中の第一回目の投票の時間はもちろんのこと、午後からの「残品セール」のくじ引きも大いに盛り上がっていました。そして、卒業生や地域の方から提供していただいた約430品の家具家電をほぼすべて、新しい引き取り手に譲り渡すことができました。

今後も参加された方々により満足していただけるよう改善をしつつ、リユース市の開催を続けていきたいと思っています。今後とも、ご理解ご支援のほどをよろしくお願いいたします。

志水宏吉氏が「力のある学校をつくる」というテーマで、地域・家庭・学校が一体となった学校教育の取組みの課題と可能性について熱演され、一般市民を含め600名以上が参加しました。引き続いて、「学校・子ども・家庭—今、求められる教育の在り方—」というテーマで4人のパネリストによるシンポジウムが開催され、教師の立場、親の立場、心理学の立場、教育学の立場から提案と討論を行いました。

シンポジウム会議室で開催された祝賀会では、杉山寛行副総長、梶田正巳名古屋大学名誉教授らの来賓をお迎えし、60年にわたる教育学部の教育研究活動の歴史を振り返り、今後の抱負について語り合いました。

全国七大学総合体育大会での 横断幕等作成補助

申請代表者：小池遼太
(名古屋大学体育会委員長 文学部3年)

名古屋大学教育学部 創設60周年記念行事を開催

申請代表者：速水敏彦
(教育発達科学研究科長)



学術講演の様子

名古屋大学教育学部は、創設60周年を記念して、5月16日（土）に記念式典、学術講演・公開シンポジウム及び祝賀会を同大学豊田講堂において開催しました。

記念式典には、濱口道成名古屋大学総長ご出席のもと、羽鳥政男文科省高等教育局国立大学法人支援課専門官、須賀藤隆教育学部同窓会長、江藤恭二名古屋大学名誉教授を来賓としてお迎えし、150名ほどの参加者でもって開催されました。

学術講演では、大阪大学大学院人間科学研究科教授の



完成した横断幕

名古屋大学体育会では、所属する50を超えるクラブの活動に対するサポートを行っています。その中であって、全国七大学総合体育大会（通称：七大戦）の運営は非常に重要なものです。今回、同窓会のご支援のもと、七大戦ののびりと横断幕を作成いたしました。これは2010年、名古屋大学を主管として開かれる七大戦を、一般学生に広く周知させていきたいという狙いがあります。名大全体を巻きこんで、主管優勝を成し遂げたいと思います。

今回作成したのびりは、生協様のご協力もあり、各食堂前に設置することができ、多くの学生に七大戦の存在を知っていただけたと思います。また、横断幕に関しては、学生会館前に掲示しました。学生会館前に掲示したことにより、文科系サークルの学生に七大戦をアピールすることができました。

2009年の冬より、2010年9月まで名古屋大学を主管として第49回七大戦が開催されます。今後とも七大戦へのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

■ 豊田章一郎氏に名古屋大学フェローの称号を授与

3月25日（水）、豊田講堂において、豊田章一郎氏に名古屋大学フェローの称号が授与されました。

名古屋大学フェロー制度は、本学を卒業又は修了した者及び本学の教育研究、管理運営等に寄与し、国内又は国外で顕著な業績を上げている方を顕彰するため、平成17年に制定されました。

当日は、大学院修了式に引き続き、修了生が列席する中、同称号授与式が行われ、平野総長のことばの後、名古屋大学フェロー称号記が総長から豊田氏に手渡され、最後に、豊田氏からあいさつがありました。

豊田氏は、昭和22年に名古屋帝国大学を卒業後、昭和30年には本学において工学博士の学位を取得しました。大学卒業の後、昭和27年トヨタ自動車工業株式会社に取締役として入社し、その後、昭和56年にはトヨタ自動車販売株式会社取締役社長に就任しました。昭和57年にはトヨタ自動車工業株式会社とトヨタ自動車販売株式会社との合併によって生まれた豊田自動車株式会社の初代取締役社長に就任し、以後同代表取締役会長、同取締役名誉会長などを歴任しています。

卓抜な指導力と緻密な戦略とによって、今日の「世界のトヨタ」の名声を確認たるものとした功績は顕著なものであり、加えて、第8代社団法人経済団体連合会会長、日本国際博覧会協会会長、名古屋大学全学同窓会会長を務めるなど、幅広い領域で本学と社会の発展に貢献したことから、今回、名古屋大学フェローの称号を授与することとなりました。

（名大トピックス No.191より抜粋）

■ 2008年ノーベル物理学賞・化学賞受賞記念名古屋大学レクチャーを開催

2008年ノーベル物理学賞受賞記念名古屋大学レクチャー「宇宙と物質の根源『対称性の破れ』のかなたに」が、2月7日（土）、豊田講堂において開催されました。

本レクチャーは、本学が主催する最も重要な講演会の一つであり、分野を問わず、世界的に高名な研究者の講演を広く一般市民の皆様に公開し、現代世界の最高の「知」に触れていただくために行われるもので、講演者には本学で最も荣誉ある「名古屋大学レクチャーシップ」の称号および表彰楯が授与されます。

3回目となった今回の講演者は、本学理学研究科出身で、ともに2008年ノーベル物理学賞受賞の荣誉に輝いた、小林誠特別招へい教授と益川敏英特別招へい教授で、素粒子

物理学の理論研究の発展に多大な影響を与えた「CP対称性の破れ」の問題について講演が行われました。

レクチャーでは、小林博士が、「CP対称性の破れと素粒子の模型」と題し、素粒子物理学のこれまでの流れや現状について解説し、第5、第6のクォークに関わる「小林・益川理論」の内容や実験による検証の結果等について分かりやすく講演しました。その後、益川博士が、「CP対称性の破れが我々に語ったこと」と題し、「小林・益川理論」の誕生に至る経緯について紹介しました。少年時代や、坂田博士、湯川秀樹博士とのエピソードにも触れられ、研究への情熱が伝わる講演となりました。

また、2008年ノーベル化学賞受賞記念名古屋大学レクチャー「オワンクラゲからのおくりもの」が、3月26日（木）、豊田講堂において開催されました。

4回目となった今回は、2008年ノーベル化学賞受賞の荣誉に輝いた、米国ウッズホール海洋生物学研究所特別上席研究員である下村 脩本学特別教授を講演者に招き、現在では、医学や生命科学などの研究に欠かせない緑色蛍光タンパク質（GFP）の発見までの道のりや発光生物の魅力についての講演が行われました。

レクチャーでは、下村博士が「発光生物研究の原点-名古屋大学」と題し、戦後の混乱期に長崎大学へ入学してから本学に移り、平田教授と運命的に出会い、その後、海外に活躍の拠点を移し、50年以上も生物発光の研究に一途に情熱を注いだ研究生活を振り返りました。講演の最後には、GFPが入った試験管に紫外線を当て、緑色に光る様子を再現するなど、下村博士が生涯をかけて打込んだ研究への情熱が伝わる講演となりました。

これらのレクチャーでは、メイン会場となった豊田講堂に加えて同時中継を行うサテライト会場がIB電子情報館に設けられ、中学生、高校生、一般の方々等多くの参加者が詰めかけ、本レクチャーに対する関心と期待の大きさが伺われました。

（名大トピックス No.190、192より抜粋）

■ 名古屋大学学術憲章を一部改正

2月2日（月）、名古屋大学学術憲章が一部改正されました。

平成12年2月15日に定められた本憲章は、本学の学術活動の基本理念として掲げられ、本学教職員は本憲章の精神に則り学術活動に邁進してきました。このたび、本学関係者のノーベル賞受賞という吉報が届き、受賞者からは本学の自由闊達な学風に関する好意的な言葉が随所にみられました。この改正では、本学が自由闊達な学風の下で学術活動を行い、その使命を果たすことが明示されたものです。

（名大トピックス No.190、192より抜粋）

「名古屋大学カード」から始まる大学支援

年会費永年無料！

加入者は、4,700人を超えました。



全学同窓会では、大学支援を強化するため、「名古屋大学カード」事業を行っています。

「名古屋大学カード」は、UFJゴールドカードと同等の機能*を持ち、年会費は永年無料です。

「名古屋大学カード」をご利用いただきますと手数料の一部が全学同窓会に還元されます。全学同窓会では、その還元金を大学支援事業（学生活動支援、就職活動支援、行事支援）に充当し、研究・教育活動を支援しています。是非、ご加入ください。

* UFJゴールドカードとは一部異なる特典がございます。詳細は申込書をご確認ください。

全学同窓会ホームページ (<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp>) から申し込むことができます。

事務局からのお知らせ From the NUAL Office

●支援会費のお願い Call for contributions

名古屋大学全学同窓会の活動は、皆様からの支援会費、寄附金に支えられています。支援会費は年度ごとのお支払いとなります。皆様のご協力をお願いします。

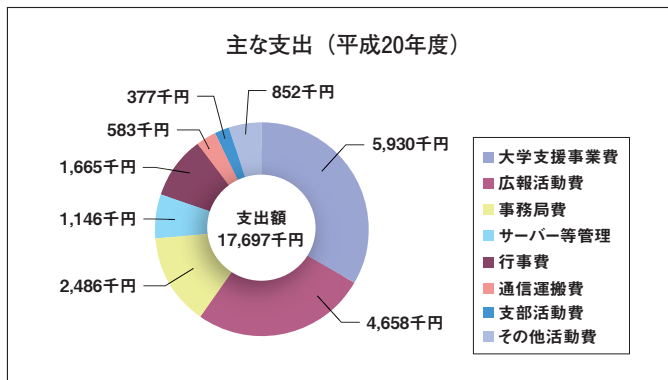
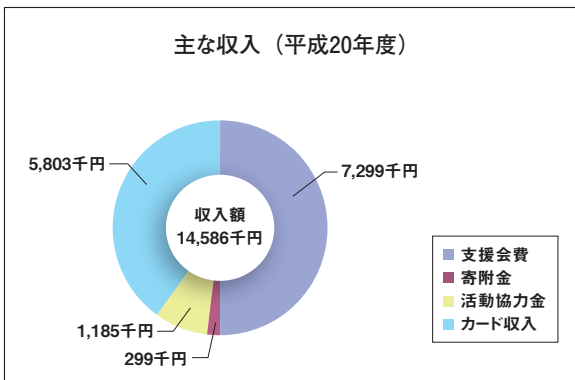
○支援会費 Supporting Fee 支援会員 Supporting member : 一口 5,000円

支援法人会員 Supporting institution : 一口 50,000円

○支払い方法 郵便振替 Post Office Account 口座番号 : 00860-8-113043

自動引落 利用ご希望の方に、預金口座振替依頼書をお送りします。関係書類をご入用の場合は、同窓会事務局にご連絡ください。

支援会費、活動協力金等は、大学支援事業や広報誌作成等全学同窓会の設立理念に合致する活動に使わせていただきました。



●住所等の登録・変更について NUAL member registration

会員の皆様は大学及び全学同窓会からの情報を間違いなくお届けするため、住所等の変更があった場合は、同窓会事務局に電子メールまたはFAXでご連絡下さい。なお、名古屋大学では、名古屋大学のホームページ上で、住所登録・変更の手続きができるよう準備を進めています。準備が整いましたら、名古屋大学全学同窓会ホームページ及び名古屋大学ホームページでご案内いたしますのでご協力をお願いします。

名簿商法にご注意ください!

名古屋大学、全学同窓会、支部及び部局同窓会とは関係のない組織から、「卒業生名簿」の作成や頒布に関する代金を請求される場合があります。不審な場合は、先方についてよくご確認の上、慎重にご対応下さい。

編集後記

大学創立70周年を記念してご寄稿頂きました稲垣先生からは、ご自身のアルバムから写真もご提供いただき、第1回の名大祭の頃など当時の様子がよくわかる貴重なものになりました。4月に就任された濱口総長へのインタビューは先生のお人柄も伺える興味深い内容です。また、編集作業中にはモンゴル支部創設の報告も加わり、今回も賑やかな誌面になりました。

今後も皆様のご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。(全学同窓会広報委員会)

NUAL Newsletter No.12 平成 21 (2009) 年 10 月発行

Nagoya University Alumni Association

NUAL 名古屋大学全学同窓会

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-783-1920

E-mail nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ホームページ <http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

編集 : 名古屋大学全学同窓会広報委員会